論文）

「美意識」についての研究

－「美道論」受講における学生の美意識変化－

富田知子[1)]　神山資将[2)]　及川麻衣子[1)]　木村康一[1)]　永松俊哉[1)]

抄 録

美意識とは、「美」に対する感覚や判断力を意味するが、その概念は地域や風土、あるいは文化や歴史などによって、様相に違いがあると言われている。[1)] これまで富田らは日本での美容に関する「美意識」のあり方について調査を行い、年齢や立場によってその捉え方が違うことを示してきた。まず日常生活の中で自身の思う美意識と実生活の一致について、学生と高齢者を比較した場合、高齢者の「自身が思う美意識」と「実生活」との一致が強く示唆された。[2)] 次に理美容師の「美意識」についての検討では、年代によってとらえ方に違いがみられた。このことから、教育や経験によって「美意識」を獲得していくことが推測できる。今回、山野美容芸術短期大学の美容教育の核となる授業「美道論」に注目し、その受講前後での「美意識」の捉え方を比較検討した。

キーワード：美意識、美道論、美齢学、美容、美道５大原則、テキストマイニング

I.　緒言

「美意識」とは、「美」に対する感覚や態度を示す。美容師をはじめ「美」を提供することを業とする者は（以降、代表として「美容師」とする）、日常の業務の中心に「美意識」を置く必要があると言っても過言ではない。また、美容師の前には顧客という個人が存在し、各々が抱く多様な美意識が存在している。「美」を意識することの意義は、「美」の追求が人の「幸福感」に関わることであろう。[3)] 山野美容芸術短期大学（以下「本学」という）の創立者である山野愛子は、著書『美容芸術論』のはじめに、「人は誰でも美しくありたいと願うものである」と述べている。[4)] よって美容の現場で求められるのは、顧客とコミュニケーションを図り、その「美意識」を汲み取りながら的確な提案をしていくスキルである。山野学苑が進めてきた、美しく生きることを目指す「美齢学」も、「美意識」をその理論の中心に置いている。「美意識」は芸術的側面から言及されることが多い。日本人の「美意識」の概念の階層構造を示し、基礎レベルに「美しさ（評価性）」「安定（活動性）」「調和」「情趣」「あいまい」「余白」「ほろびやすさ」を挙げ、さらにその下位レベルが存在するとされている。[1)] 美容における「美意識」は、「ヘアスタイル」などの造形美において、その階層構造に一致するところは多いと考える。しかしながら、造形美とは別に、日常生活を支える「美意識」とは、どのような存在なのだろうか。名詞としての美意識の意味を理解することはできても、美容に関する個人が抱く美意識を包括的に説明する試みは少ない。

まず富田（2017）は、現在を生きる生活者にとっての美意識と、それが実際の生活の中にどのように根ざしているのか、特に高齢者にとって生活の QOL との関係性を中心に、他の世代との比較を基に、美意識の有り様と実際の行動に分けて、美容に関する行動との相関について調査を行った。美容学生と高齢者を対象に、日常行動の中で自身の思う美意識と実生活との一致度についてアンケート調査を行った。１．文化（情緒・文化的活動）２．生活習慣（健康・ライフスタイル）３．美容（美容・身だしなみ）４．社会通念（道徳・マナー）５．上記以外（対照群として）についての設問 20 問について、自身が思う美意識との関連の強さと、自身の実生活での意識を 5 段階評価で行った。集計の結果、75 歳以上の回答者は、各項目における自己の美意識と実際の生活における意識との乖離が他と比べて、少ない傾向があることが示された。これは、

1)　TOMITA Tomoko　OIKAWA Maiko　KIMURA　Koichi　NAGAMATU Toshiya
2)　KAMIYAMA Motoyuki

1)山野美容芸術短期大学
連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鑓水 530
2)一般社団法人知識環境研究会

若い世代に比べ美意識がより確立され、生活にも根ざしているためだと推察できた。美容学生に関して言えば、自身の容姿に関してコンプレックスを美容で補うことに対する興味が強い傾向もあり、美に対する関心が自尊感情と相反する関係が生まれ、向上心につながっていくことが予想された。[2)]

次に、理美容師の「美意識」の調査では、自由記述アンケートをテキストデータ化し、質的・量的両面の技法を用いたテキストマイニングソフトウェア（KHcoder）を用いて分析を行った。（テキストマイニングについては改めて後に述べる）結果、すべての理美容師に「美意識」は内在していることが明らかになった。年代別の言葉の出現頻度を比較すると、「自分」は 20 代で最上位になり、「努力」「高い」など「自分を中心として、美に近づく」という視点が特徴にある。30 代でも「自分」は上位にあるが、「心」の頻度が上がり、「気持ち」「磨く」「言葉遣い」が出現し、他者の視点が加わる。40 代では「自分」は上位にあるが、「人」と密接な関係になり「清潔感」が出現する。50 代では人が先行し「自分」の順位は大きく下がり、「身だしなみ」「清潔感」「心がける」が多く出現するようになり、60 代と 70 代では「自分」「内面」は消えるが、「人」「心」が大きく浮上し、また「お客様」が上位に上がり、「清潔感」「若い」に特徴がある。年代が上がるとともに利他的な視点で「美意識」が存在し、それが自身にとって「美意識」を内在させる意義となっていると考えられる。

このような変化は、年代による身体的な差異のみならず、経験や教育による影響が考えられる。グローバルな現代社会の多様な「美」に常に触れている学生が、自由で十全なる自己表現ができ、また迷うことなく他者の「美意識」を柔軟に受け止めるために、多様な「美」について学ぶ機会は有効であろうと考える。

山野学苑として「美齢学」の構築を目指すとともに、本学は 2021 年度に学科改組があり、創立より建学の精神としている「美道五大原則（髪・顔・装い・精神美・健康美）」によって「学生を成長（人間形成）」させる教育の改革を行った。それにあたり 2021 年度より、1 年次前期に建学の精神を基に構成された授業「美道論」が新たなカリキュラムで展開されている。ここでは、「日本独自の美意識の成り立ちを基本に、自己実現に向けた審美のあり方を学び、自律と利他を重視し、美しく生きるための自己研鑽を続ける道（プロセス）を学ぶ」ことを目的としている。学生には入学前より「美しい生き方」について自身で考えることを促し、入学後の学びをより深いものとする準備を行っている。本研究は、前に記したとおり、美容師として必要な「美意識」の理解について、この「美道論」を受講する前後においてどのような変化があるかを学生の言葉から調査し、授業目標達成との関係を考察する。その違いをより明確に比較するために、学科改組前の学生の調査結果とも比較する。ここで導き出された結果は、授業の教育効果の検討資料（材料）となり得ると考える。調査方法として、これまで理美容師に向けて行ってきた方法と同じ自由記述によるテキストマイニングによる分析を行う。

「学習成果（学修成果）」（learning outcomes）は、現代の教育改革のキーワードとなっている。[5)] 本学では IR 室を置き、①通常授業評価としてアンケートと②長期的に自身を観察するルーブリックを用いた到達度評価を行っている。①は、学生の視点から当該授業及び自身の取り組みを評価するものである。Google forms を使用し、教員へのメッセージ（意見・感想）等の 1 項目自由記述を含む 29 項目で、主に量的な評価となる。②については、学生自身の目指す学習目標の達成度を質的な観点を量的な評価へと変換し可視化を行っている。このような評価は、授業を構成するための貴重な指針となると考える。しかし、授業での学習がその前後で具体的にどのような変化を学生にもたらしたかを客観的に比較するものではない。百合田（2012）では、教育効果を図ることを目的とし調査票に多くの自由記述の質問が含まれることが多くあるが、その回答が質的研究の方法論を用いて分析されることはまれであるとし、テキストマイニング技術の活用を検討している。テキストマイニングは、数量的調査によって得られる情報を、非構造的なテキスト情報の中からマイニング（採掘）し、その活用を図る方法と説明を加えている。さらに 1 つの講義の事後において、自由記述のアンケートを行い、定量的に提示する方法では知ることが困難であった興味・関心の対象とその広がりについて探索することが、テキストマイニングの活用によって一定の効果をみることができたとしている。[6)]

本調査においては、講義の前後において自由記述のアンケートを行い、意識の変化の可視化を目的とし、さらに、現役理美容師との比較も行っている。これは

美容の専門職と美容の専門性をもった職業に就くことを意識している学生という集団の中で比較が可能であると考えた。このような学習成果の調査は、特に美容の領域では少なく、美容基礎教育の一助となると考える。

II. 研究方法

本学美容総合学科学生を対象とし、Google forms を使用し、アンケートを行った。

アンケート内容：1 回目①年齢　②性別　③自由記述「美意識とはどのようなものでしょうか。」、2 回目は④「美道論を受講してあなたの美意識の理解にどの程度関係しましたか」（図 8）を、0 から 5 までの 6 段階で程度を回答する設問を加えた。倫理的配慮として、無記名での回答に対し、前後の回答全体での比較を行い、個人が特定されないように分析を行った。

調査対象：山野美容芸術短期大学美容総合学科
2020 年度美容デザイン専攻：87 名　回答率 94%
2021 年度美容総合学科全専攻：164 名
（内 美容デザイン専攻に準じる美容師免許取得コースは 134 名）　回答率 70%
2022 年度美容総合学科全専攻：195 名
（内 美容デザイン専攻に準じる美容師免許取得コースは 161 名）
1 回目（受講前）回答率 88%
2 回目（受講後）回答率 72%

分析方法：KHcoder を用いて自由記述データを分析し、Ward 法（距離は Jaccard）で抽出語の階層的クラスター化した。

III. 結果

以下のように分析結果を図で示した。

１）調査１（2021 年実施）：
2020 年度学生 2 年次美道論未履修（図 1）及び 2021 年度学生 1 年次美道論履修済み（図 2）。それぞれ 3 回以上の言語の共起ネットワークを示す。図 1 と図 2 の比較で、2020 年度学生では見られない「内面」が、2021 年度学生の美道論履修後では高頻度に出現し、「美しい」に強いつながりが見られた。また、「人」と「相手」「他者」の視点が加わる。双方に見られる「自己」には、前者では「満足」、後者では「肯定」とつながる。2021 年度学生の特徴では、「芸術」「音楽」と「服装」から、「髪」「顔」「ファッション」への広がりが見られ、2020 年度学生には、「服装」や「髪」「顔」は「健康」や「身だしなみ」や「相手」につながる「行動」との関係で出現している。「メイク」と「美容」の出現は「不安」「気分」とつながる。

２）調査２（2022 年実施）：
2022 年度学生 1 年次美道論受講前（図 3）と 1 年次美道論受講後（図 4）それぞれ 5 回以上の出現言語の共起ネットワークを表示した。図 3 と図 4 の比較で、2022 年度学生には、「内面」「肯定」とのつながりは双方にみられる。後者では、「心」と「美しい」とのつながり、「自分」と「自信」のつながりが特徴的にみられる。
出現言語回数が１）２）で異なるが、それぞれの調査での平均出現頻度に基づき調整されている。

３）意識構造（共起ネットワーク）を受講前後で、共起語と固有語を比較した。（図 5）
2022 年学生（前）と（後）の中で出現する語（出現回数 20 回以上の語）がどのように共起しているかを表示する。右のピンク色の四角が（前）のグループの表示で、左の四角は（後）グループを示している。両方に共通して出現する特徴語は真ん中の黄緑色の丸で表示されている。左右の外側に配置されているオレンジ色の丸が前後に固有の特徴語を示している。

４）階層的クラスター分析を行い、2020 年度学生（美道論未履修）、2021 年度学生（美道論受講開始）、2022 年度（美道論受講前後）について比較を行った。（図 6）分析は Ward 法（距離は Jaccard）で抽出語をクラスター化しており、出現回数 20 回以上の語を基にして、サンプルの類似度を表示している。2022 年の 2 グループはより近似し、次いで、2021 年グループとも近似している。最も遠くなっているのは、2020 年グループとなった。

５）2022 年度学生の受講と美意識の理解について（図 8）、0 から 5 の 6 段階の程度を選択する設問では、3（46.4%）、4（32.9%）、5（19%）、3 以上合計 92.9%となった。

IV. 考察

１）調査１および調査２の結果から、改組前は 2020 年度学生のみのデータになるが、「美意識」との関係は「自分」を中心として「努力」「自己」「満足」の出現の特徴は、富田（2016）調査の 20 代美容師に見られる傾向と類似している（図 7）。この調査は、2016 年 7 月に関西地区理美容室 33 店舗の 20 代 18 名の美容師を対象に行ったもので、実施時期からもわかる通り「美道論」を受講していない。階層的クラスター分析の結果からも、2020 年度の学生は 2021 以降の学生とは離れている。2021 年度以降の学生の「美意識」の思考は、「外見」とともに「内面」とのつながりが出現し、「他者」「利他性」を含む改組後の建学の精神に基づいた教育の再構築から始まる「美道論」の影響が示唆されている。

２）意識構造（共起ネットワーク）共起語と固有語の結果から、固有語に注目すると、受講前では、「清潔」「ケア」「顔」「髪」「服装」など美容に関わる直接的なものがみられるが、受講後は美容を中心に「健康」「精神」「自信」等美容による結果の出現がみられ、「周り」等周囲との関係性、「感じる」という五感に関わる語が出現している。これも、「美道論」の授業にて、建学の精神美道五大原則「髪」「顔」「装い」「精神美」「健康美」それぞれに関して、それぞれの生きる上での持つ意味に触れた結果、より深い階層の理解に至ったと考えられる。

３）図 8 の結果から、学生は「美道論」の受講が自身の美意識の理解と関係あると考えていることが示唆された。

「美道」は日本独自の「茶道」「武道」などと同様に、単に形を完成させるのではなく、その道程が重要であり、時代とともに日々変化する「美」、また人それぞれの「美」に触れ提供し続ける美容を業とするものが、それと向き合い続け、問い続けることが重要であると示している。

今回の調査で示された、学生が認識し、表出した言葉をさらに検証し、「美道論」が、美容が自身のみならず、他者の「美しく生きる」につながることの理解と、提供すべき技術や次の学びの意義に結びつけることが重要である。

謝辞

本調査を進めるにあたり、「美道論」をご担当された先生方にご協力いただき、心より感謝申し上げます。

文献

1） 高橋浩伸他,日本人の美意識に関する基礎研究,芸術工学会誌,vol35,2006.9,pp.56-61.
2） 富田知子,保高一仁,現代の美意識と美容の関係—美意識調査についての検討—,アートミーツケア学会誌,2017,p.16.
3） 大曾根悠子,前野隆司,美しさと幸福の関係 -審美欲求に着目したアンケート調査に基づいて-,慶應義塾大学学術情報リポジトリ（KOARA） https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002012-0003（2023.1.16）
4） 山野愛子,美容芸術論, p.1,株式会社 IN 通信社,1991.
5） 松下佳代, 学習成果とその可視化,高等教育研究,第 20 集,2017
6） 百合田真樹人,教育効果としての学習者の意識変化とその評価方法,日本科学教育学会論文集,vol.36,2012
7） 渡邉純,渡辺秀臣,講義形式授業に対する学生の自由記述形式感想の検討—学生評価を教員と学生の対話手段とする位置づけから—,北関東医学,第 55 巻,4 号,2005
8） 山野正義,美齢学,朝日新聞出版,巻号, 2018.
9） 富田知子,大石華法,理容師・美容師の「美意識」に関する意識調査,総合的健康美,第 8 巻, 2018, pp.71-82.
10） ドナルド・キーン,金閣寿夫,日本人の美意識,中央文庫, 1999.
11） 谷川孝博,美意識の変遷と開発工学,開発工学, vol.12 No.2, 1993 pp.17-23.
12） 山野愛子ジェーン監修,木村康一,富田知子,永松俊哉,美道論,国際美容協会, 2022.
13） 新井範子,女性にとっての美のイメージと意識,繊消誌,vol.39 No.8,1998,pp.495-500.
14） 熊澤玲香他,日本人の美意識の印象整理～色・形・動きに注目して～,日本デザイン学会,デザイン学研究,2021,pp.332-333.
15） 杉山佳菜子,現代青年の美意識（研究発表 SA）,日本青年心理大会発表論文集,2006 p.34.
16） 木幡順三,美意識の現象学,慶応通信株式会社,1984.
17） 木幡順三 ,美意識論,東京大学出版会,1986.

A Study of Students' Perceptions of Beauty
-A Study on the Change of Students' Aesthetic Attitudes in the Course of “Bidou Theory”

提出日：2023/1/16 12:00

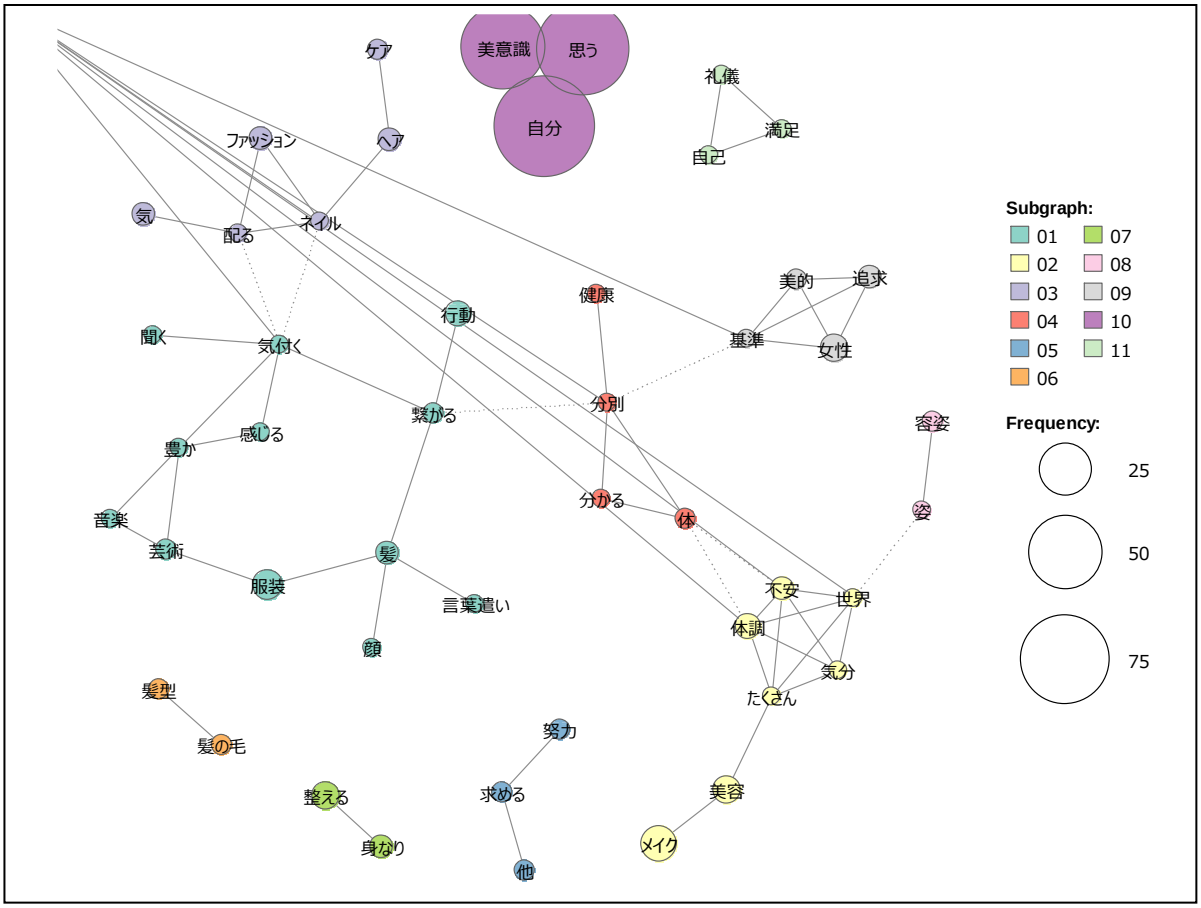

図 1 .2020 年度学生（美道論未履修 2 年）の共起ネットワーク

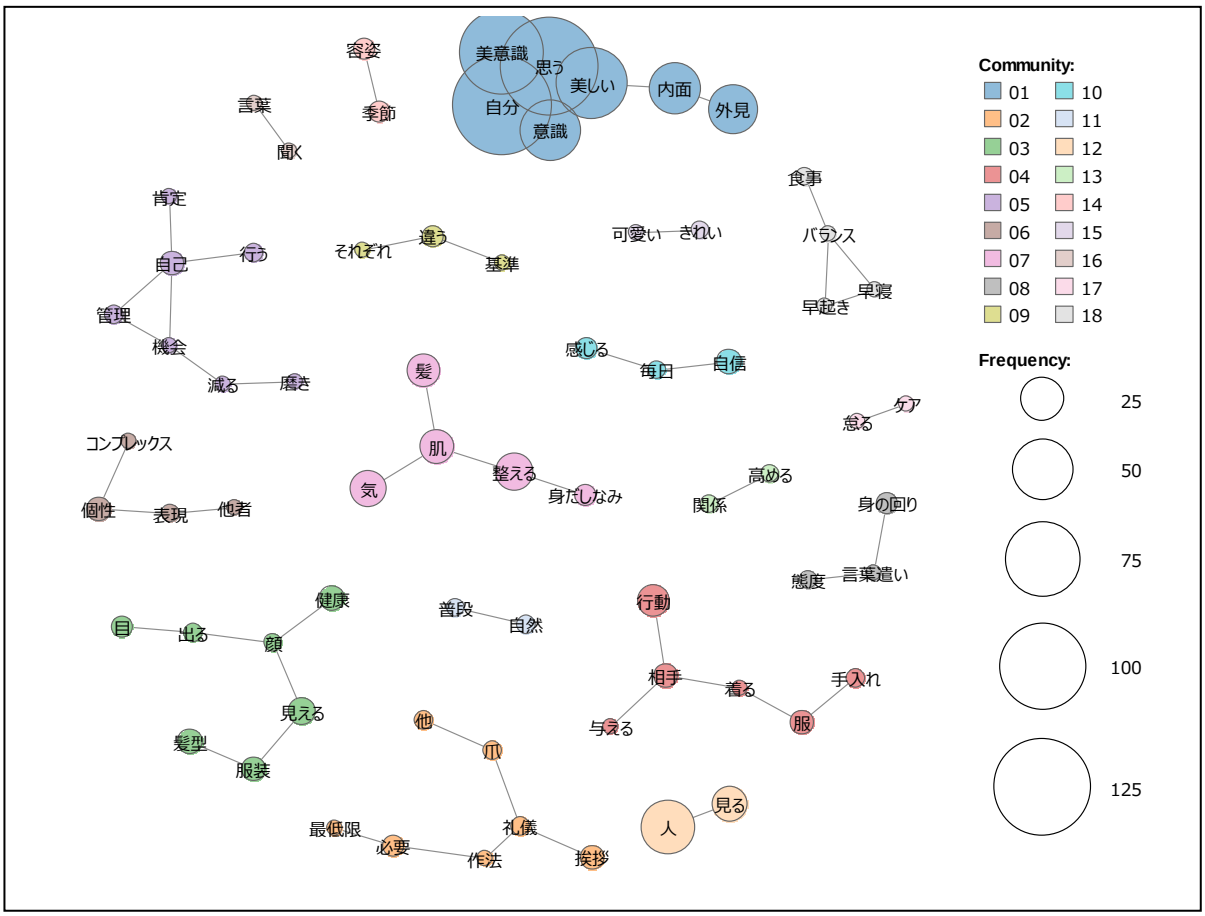

図 2 .2021 年度学生（美道論履修済み 1 年）の共起ネットワーク

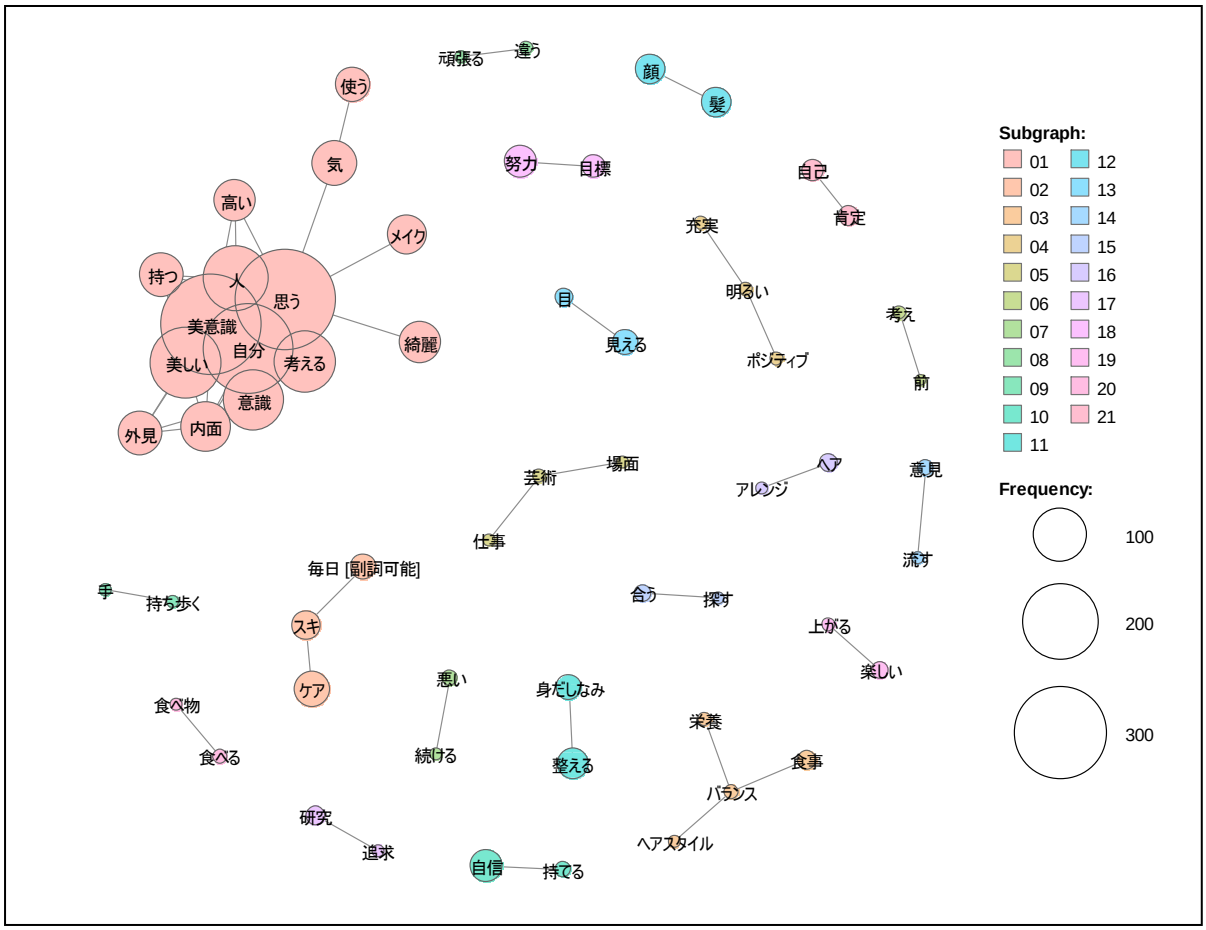

図 3.2022 年度学生 1 年次美道論受講前の共起ネットワーク

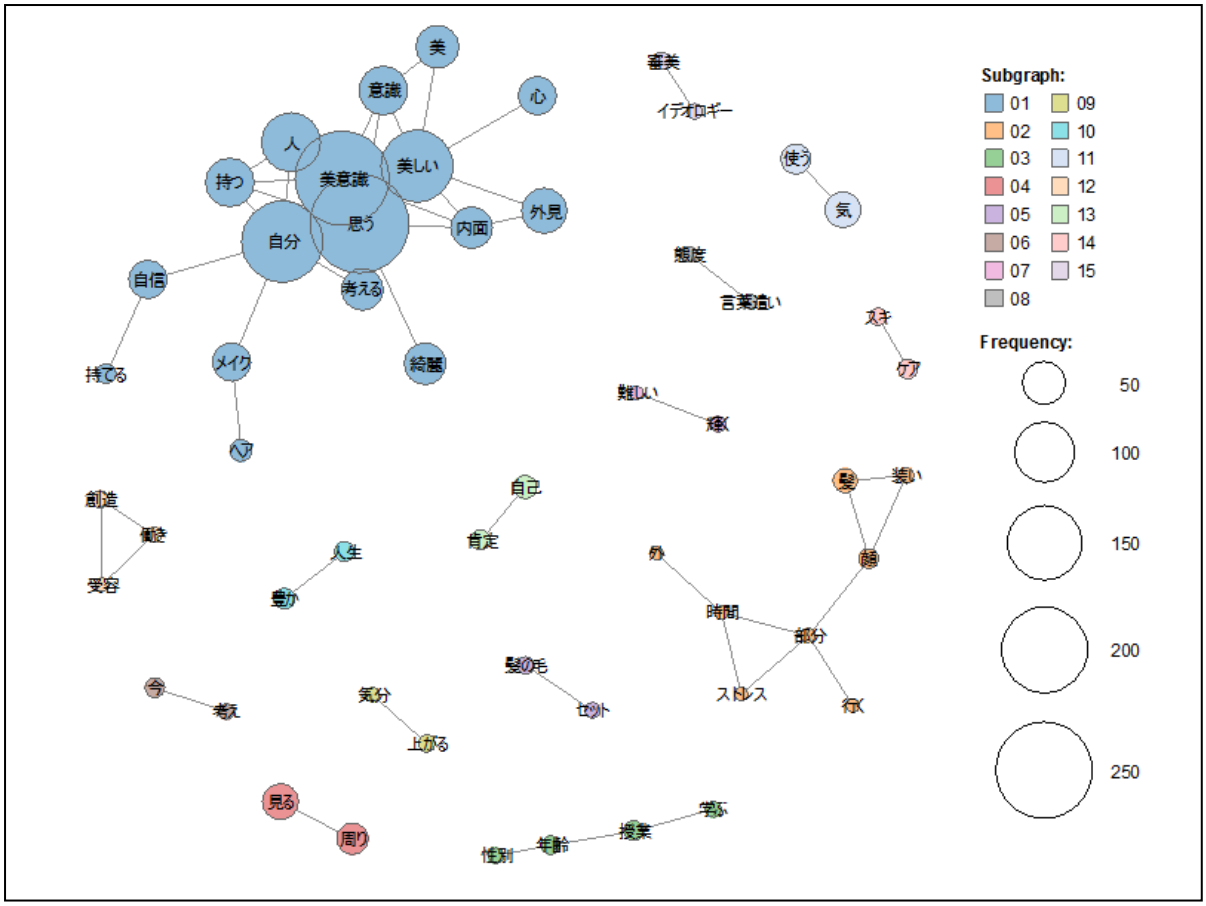

図 4.2022 年度学生美道論 1 年次受講後の共起のネットワーク

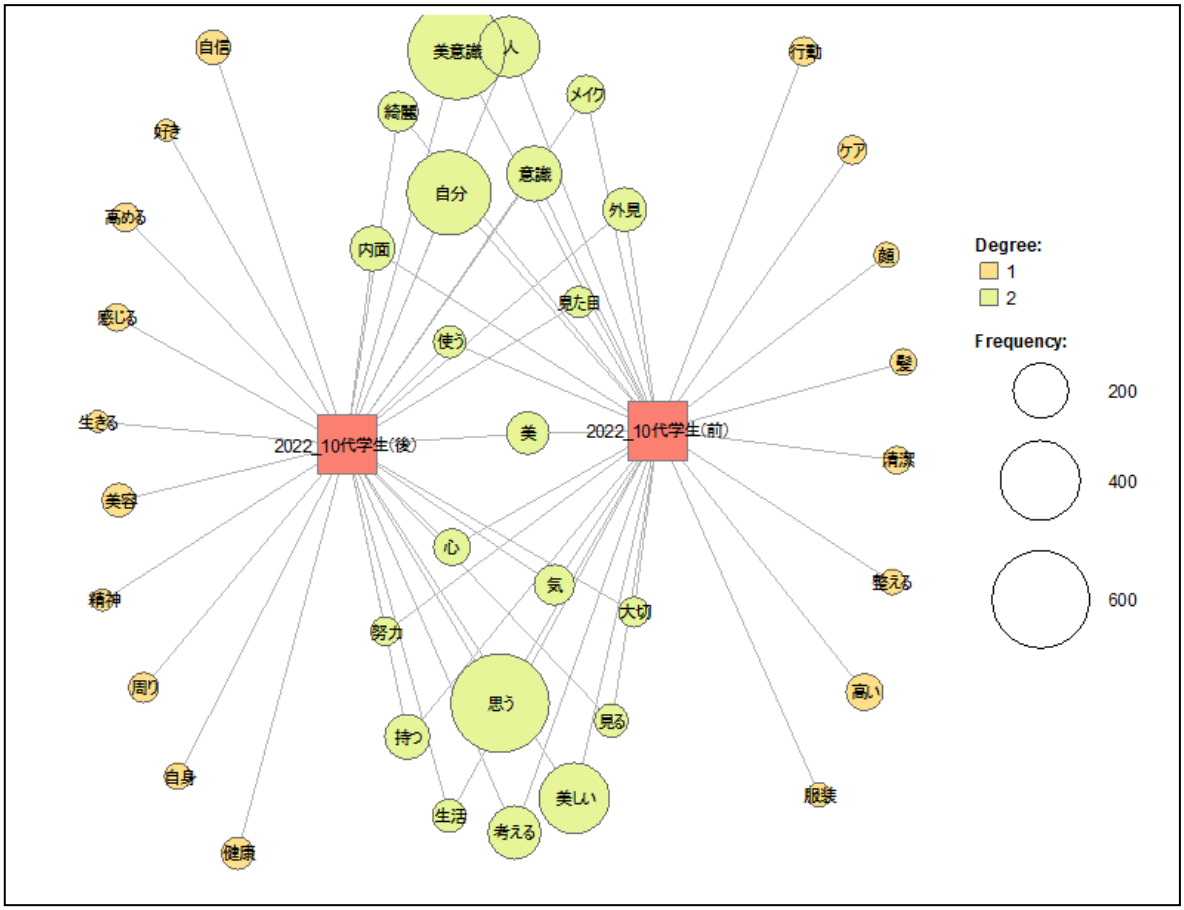

図 5.2022 年度学生前後での比較　共起ネットワーク

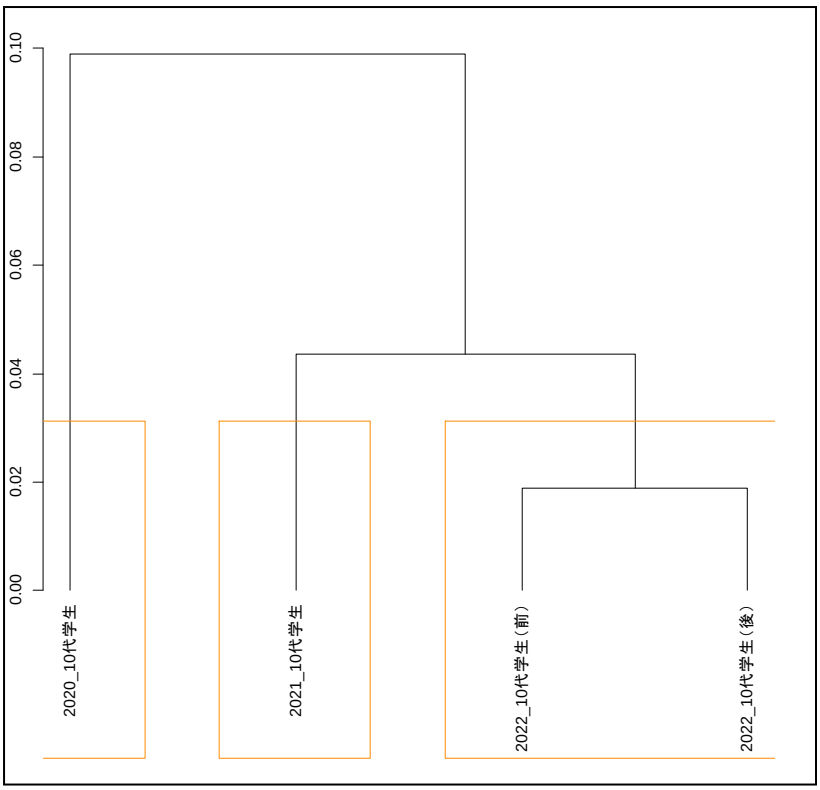

図 6. 10 代学生の 4 グループの階層的クラスター分析

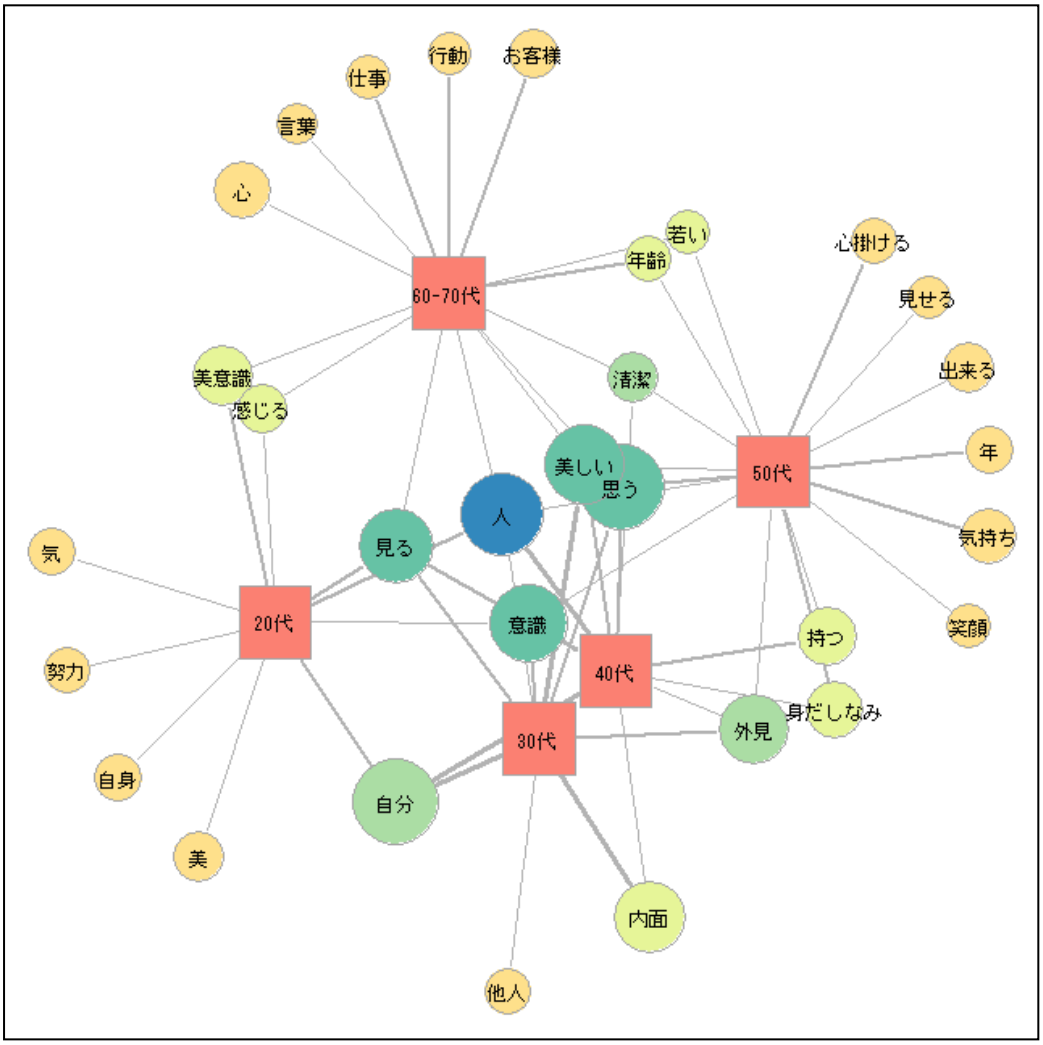

図.7 理美容師の美意識調査結果（2016）の共起ネットワーク

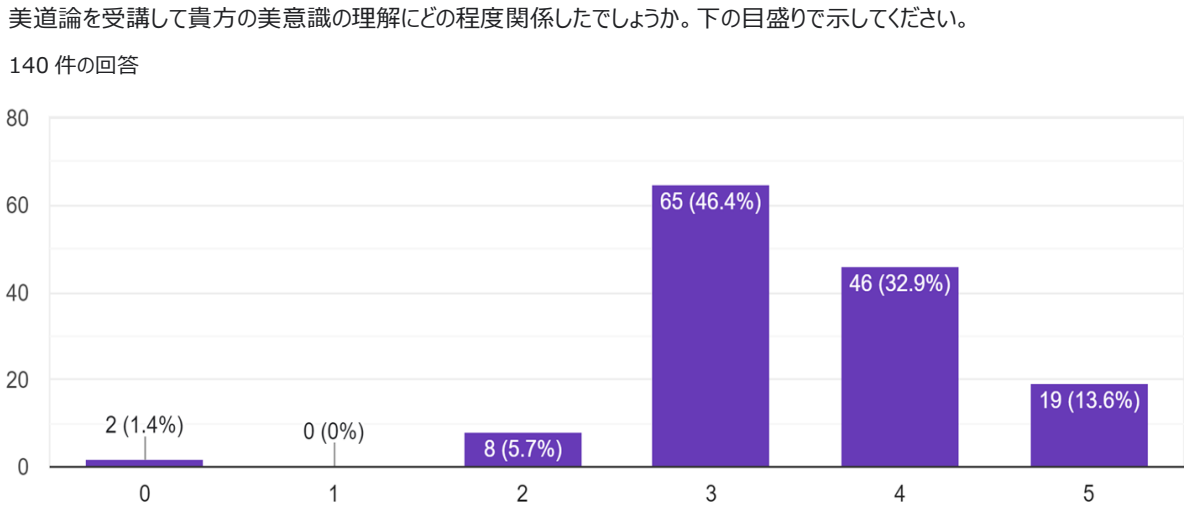

図.8 2022 年度学生　受講と美意識の理解の関係の度合い